



# 久米島紬

**指定名称** くめじまつむぎ 久米島紬（国指定重要無形文化財 工芸技術）  
**所在地** 久米島町一円  
**指定年月日** 平成16年9月2日  
**認定・指定区分** 久米島紬保持団体

久米島紬は、久米島に伝承されている絹織物の製作技術で、その起源は定かではないが養蚕については、15、6世紀までには行われていたとされる。琉球王府時代に貢納布に定められると、島の女性は布屋（村屋）に集められ、役人の厳しい管理や指導のもと、貢納布を織らされていた。各村には貢納布以外に真綿の割り当て負担もあり、集めた真綿を再度配分し、紬の材料として紡がせていた。

現在の久米島紬は、一時中断していた養蚕と桑の栽培が近年復活し、技術の伝承が再び図られるようになり、養蚕、糸作り、手くくり拵、天然染料による染色、製織、全ての行程を手作業

で行い古来の技法を伝えている。染色は、すべて島内産の天然の材料が使用されており、地糸はグール（サルトリイバラ）やティカチ（シャリンバイ）などの茶系染料で染めたあと、鉄分を多く含有する池の泥を用いて媒染を行い、久米島紬独特の深みのある黒褐色に染めあげる。拵部分の色にはクルポー（ナカハラクロキ）とヤマモモを同時に煎じた黄色系染料などが用いられる。

平成16年9月、久米島紬は地方的特色が顕著で、芸術上価値が高く、工芸史上重要な地位を占める染織技術であると評価され、国の重要無形文化財に指定された。